

「デジカメでの長時間露光 (1)」

お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋

かつての天体写真の撮影は、フィルムが入った一眼レフカメラが主流だった。天体写真に適したフィルム(例えばプロビア 400 ポジフィルム) 選ぶところから始めなければいけない。一晩かけて撮影しても、現像に出すまで、作品の出来はわからない。北極圏でオーロラを撮影している時は、寒さでフィルムを巻き取る時に、破断してしまうこともあった。

そのかわり、機械式のカメラに電源は必要なく、故障も少なかった。何よりも、写真の出来が美しかった。



「重装備のオーロラ用フィルム式カメラ」

「エレファントマン1号」と「赤ずきんちゃん2号」
開口部はファインダー穴、レリーズ穴、巻き上げノブ穴のみで、零下35度で2時間、全く支障なかった。



「ポジフィルムで撮影したオーロラ」 (2ページ目に拡大写真あり)

雄大なオーロラの魅力を、完璧に再現している。粒状性が良いので、大版印画紙へのプリントも可能。

この頃使っていた、フィルム式の一眼レフカメラのシャッターボタンには、必ず「レリーズ孔」があった。カメラ本体に触らずに、シャッターを切る為の、レリーズを取り付ける為である。



「古い一眼レフカメラにレリーズを取り付けた様子」
このカメラは「写真屋さん45」のオリジナルカメラ「45マニュアル」という、超レアなカメラ。天体写真用としても、大変使いやすかった。

ところが、最近のデジタル一眼レフカメラのシャッターボタンには、このレリーズ孔がない。(写真下) CCD感度 (ISO) が向上したこと、長時間露光をする必要がなくなったこと、更にシャッターをリモコンで押せるようになったこと・・・などが原因だろう。これは困った。しかし、何とかなるものである。(つづく)





「ポジフィルムによるオーロラ写真」

ニコンF2 プロビア 1600 増感現像

スウェーデン・アビスコ村・トーネ湖（凍った湖上）

2枚とも 2001年1月 撮影；C. Tanaka